

企 画 展

世界遺産展

～出土品からみた琉球王国のグスク～

首里城跡



中城城跡



斎場御嶽



座喜味城跡



識名園



今帰仁城跡



園比屋武御嶽石門



玉陵

勝連城跡

2002年 2月

沖縄県立埋蔵文化財センター

凡 例

- 1 本書は、2002年2月2日（土）～3月3日（日）まで開催する企画展「世界遺産展 - 出土品からみた琉球王国のグスク - 」の展示を補完するものとして編集したものである。
- 2 本企画展は、沖縄県立埋蔵文化財センターが主催し開催する。
- 3 本書の順序は、展示の各コーナーに沿って掲載している。
- 4 本展示に関わる協力機関の芳名は、巻末にまとめて列記する。
- 5 提供していただいた写真には、機関名を明記している。

目次

あいさつ	1
世界遺産	
世界遺産とは？	2
世界遺産に推薦登録されるためには？	
「琉球王国のグスク及び関連遺産群」が世界遺産登録されるまで	3
登録内容について	
沖縄の世界遺産	
沖縄の世界遺産マップ	4
城	
グスクからみた三山時代	5
グスクに見られる防御	
中城城跡	6
座喜味城跡	7
交易	
大交易時代の琉球王国	8
交易から生まれた文化	
今帰仁城跡	9
勝連城跡	10
首里城跡	11
首里城跡から出土した陶磁器	12
識名園	13
祭祀	
御嶽祭祀	14
グスクと御嶽の関わり	
斎場御嶽	15
園比屋武御嶽	16
玉陵	17
日本の世界遺産	
日本の世界遺産マップ	18
用語解説・参考文献	19
協力者一覧	20

あ い さ つ

2000（平成12）年12月オーストラリアのケアンズで開催された第24回世界遺産委員会において、今帰仁城跡、座喜味城跡、中城城跡、勝連城跡、首里城跡、園比屋武御嶽石門、玉陵、識名園及び斎場御嶽の9遺産からなる「琉球王国のグスク及び関連遺産群」が世界遺産に登録されました。これにより、琉球王国の歴史・文化の独自性が、改めて広く世界に認識されたものと思われまます。

これまで、沖縄県下では首里城跡をはじめとした各地のグスクで復元整備に伴う発掘調査がすすめられ、琉球王国の歴史・文化を知る手がかりとなる様々な成果があがっております。また、世界遺産の登録と前後して、国指定の重要文化財となりました首里城京の内跡と斎場御嶽の出土遺物は、琉球王国の交易・祭祀をうかがい知る上でも貴重な資料といえます。

この度、当センターでは、企画展「世界遺産展—出土品からみた琉球王国のグスク—」を開催することとなりました。今回の展示は、これまで沖縄県教育委員会をはじめとする各市町村教育委員会により行われた発掘調査や復元整備によって得られた資料にもとづき概観していきます。

本展示では、世界遺産群に登録されたグスクなどから出土する多くの貿易陶磁器などから「大交易時代の琉球」、グスクの構造や出土した武器武具類からは「城塞としてのグスク」、グスクと御嶽の関わりからは「琉球王国の祭祀」などの側面から各遺産の特徴を提示することによって、琉球文化の多様性を表現したいと考えております。

本企画展の開催により、世界遺産に対する価値を普及させるとともに、文化財の保護と活用に対する理解が深まれば幸いです。

終わりに、本企画展を開催するにあたりまして貴重な資料をご提供頂きました関係各機関に心より感謝申し上げます。

平成14年2月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 知念 勇

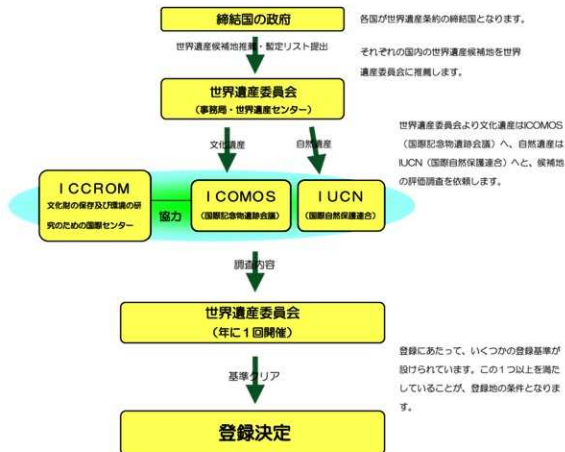
世界遺産とは？

世界遺産とは1972年に開催された第17回ユネスコ総会で採択された「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」に基づいて、世界遺産一覧表に登録された、顕著な普遍的価値を有する人類全体の遺産を言い、自然遺産、文化遺産、複合遺産の三つに分類されます。

2001年1月現在、世界遺産の件数は690件で、内訳は、自然遺産138件、文化遺産529件、複合遺産23件です。これら世界遺産物件を持つ国は122カ国で、158カ国が締結国として加盟しています。日本は1992年に125番目の締結国として仲間入りしました。

現代を生きる世界のすべての人々が共有する「世界遺産」は、未来の世代に引き継いでいくべき「人類共通の宝物」として、私たちは守っていかねばなりません。

【世界遺産登録へのプロセス】



世界遺産に推薦登録されるためには？

世界文化遺産に登録推薦するためには、顕著な普遍的価値を有する文化財であること、真実性を有すること、国の指定文化財であること、不動産であること、緩衝地帯（バッファゾーン）が設定されていることが必要条件です。

*真実性 (authenticity)

＝素材、技術、環境、意匠（デザイン）

琉球王国のグスク及び関連遺産群 が世界遺産登録されるまで

本遺産群は日本が世界遺産条約を批准した1992年に、世界遺産委員会に提出した暫定リストに登録されました。世界遺産調査官であるヘンリー・クシア博士（イギリスの考古学者）による評価のための調査が1993年に行なわれました。その結果、毎年2～3月に開催される国際記念物遺跡会議（ICOMOS）において審議された後、正式に国際記念物遺跡会議の評価として決定されました。登録の条件として史跡周辺の開発を制限する「緩衝地帯（バッファゾーン）」の設置が必要なため、1994年から沖縄県は関係市町村と調整を進めました。文化庁は条件が整った1995年5月、世界遺産に推薦しました。

2000年初めに世界遺産委員会の委託を受けた国際記念物遺跡会議の専門家が来沖し、推薦物件の評価調査を行いました。2000年11月からオーストラリアのケアンズで開かれた国連教育科学文化機関（ユネスコ）の第24回世界遺産委員会で、日本や中国、東南アジアとの政治、経済、文化の交流で形成された独立王国としての独自の発展を遂げた特異性が評価され、「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として世界遺産に登録されることになりました。

我が国では、それまで姫路城や屋久島など10件の遺産が世界遺産に登録されており、「琉球王国のグスク及び関連遺産群」が11番目の世界遺産（文化遺産では9番目）となりました。

登録内容について

名称	琉球王国のグスク及び関連遺産群
所在地	沖縄県（国頭郡一今帰仁村、中頭郡一読谷村・勝連町・北中城村中城村、那覇市、島尻郡一知念村）
指定範囲	9資産（史跡7、重要文化財2棟、特別名勝1）
	登録資産の面積 54.9ヘクタール
	緩衝地帯の面積 559.7ヘクタール
	合計 614.6ヘクタール

世界遺産の登録基準

世界遺産委員会が定める世界遺産の登録基準の概要は下記の通りです。

「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の選定基準に当てはまる項目は青文字にて示しています。

◆文化遺産の登録基準

- 1 人類の創造的天才の傑作を表現するもの。
- 2 ある時期を通して、または、ある文化圏において、建築、技術、記念碑的芸術、町並み計画、農耕デザインの発展に関し、人類の価値の重要な交流を示すもの。
- 3 現存する、または、消滅した文化的伝統、または、文明の、唯一の、または、少なくとも稀な証拠となるもの。
- 4 人類の歴史上重要な時代を例証する、ある形式の建造物、建築物群、技術の集積、または、景観の顕著な例。
- 5 特に、回復困難な変化の影響下で損傷されやすい状態にある場合における、ある文化（または、複数の文化）を代表する伝統的集積、または、土地利用の顕著な例。
- 6 顕著な普遍的な意義を有する出来事、現存する伝統、思想、信仰、または、芸術的、文学的作品と、直接に、または、明白に関連するもの。

◆自然遺産の登録基準

- 1 地球の歴史上の主要な段階を示す顕著な見本であるもの。これには、生物の記録、地形の発達における重要な地学的進行過程、或は、重要な地形的、または、自然地理的特性などが含まれる。
- 2 陸上、淡水、沿岸、及び海洋生態系と動植物群集の進化と発達において、進行しつつある重要な生態学的、生物学的のプロセスを示す顕著な見本であるもの。
- 3 もっともすばらしい自然の現象、または、ひときわすくれた自然美をもつ地域、及び、美的な重要性を含むもの。
- 4 生物的多様性の本来の保全にとって、もっとも重要かつ意義深い自然生息地を含んでいるもの。これには、科学上、または、保全上の観点から、すくなくとも普遍的価値をもつ絶滅の恐れのある種が存在するものを含む。

沖縄の世界遺産マップ



さんざん グスクからみた三山時代

今から約900年前、交易の拡大や金属器の普及、農耕・牧畜の発達により人々の生活は豊かになりつつありました。しかし、それと引き替えに生産量の格差が発生し、それを解消する手段として集落同士の争いがおこるようになりました。やがて、その争いの中から「按司あじ」とよばれる有力な人々が現れ、集落をまとめていくようになっていきます。そして、按司の住居は石垣で囲んだり、堀切ほりきりを用いて外部しやたんと遮断するといったものが現れました。「グスク」と呼ばれる遺跡がそれです。グスクは主に小高い丘の上に造られ、かつ集落に住む人々とは離れた場所にあり、按司の力が大きくなるにつれ巨大化していきます。

各地に巨大なグスクがつくられていく中で、今から約600年前（15世紀）には国頭地域くにかみの今帰仁グスクなまへじん（北山）、中頭地域の浦添グスクうらそえ（中山）、島尻地域の大里グスクおほさと（南山）を根拠地とした「按司」が王と名乗って明や朝鮮へ使者を派遣するようになります。この3つの地域が沖縄本島にあった時代を「三山時代」とよんでいます。

これらの国の按司が根拠地としていたグスクはいずれも大規模なものですが、それら以外にも沖縄本島内には大規模なグスクが多く存在しています。このことから3つの国の王は絶対的な権力をもっていたのではなく、他の有力な按司たちの代表者としての側面が強かったものと思われます。

グスクに見られる防衛

まずグスクをみて驚くのは、高く、幅広い石垣が長く廻らされていることです。いうまでもありませんが、内部に入れられないための障壁しょうへきとして石垣は造られていました。さらにこの石垣は、突出させたり、湾入わんにゅうさせたりして守り手側の死角をなくす工夫がなされています。そのひとつに凸状に石垣を張り出させる工夫がみられます。これは主に中国大陸や韓半島の城でみられる防衛施設で、大規模なグスクでは多く採用されています。

一方でこのような巨大な石垣をもっている、出入口となる場所はどうしても弱点となってしまいます。それを補うために出入口を通路状にしたり何重にも門を設置したりするなどして複雑に出入口を固めています。もちろん、ただやみくもに複雑な出入口をつくるのではなく、やはり守り手側の死角をなくす工夫を施しています。

こうした石垣を用いたグスクの防衛施設ばかりが目立ってしまいますが、石垣をもたない部分でも優れた防衛施設をみるができます。小さな平場を斜面に多く設けて守り手側の足場にしたり、地形上の弱点になる場所に堀切を設置したり、といった工夫です。このような防衛施設は日本本土の中世城郭では一般的に見ることができます。

これらからグスクの防衛施設の特徴として中国大陸、韓半島、日本といった東アジアの城と共通している部分が多くみられるといえます。



中城城跡一の郭への入口

なかくすくじょうあと

中城城跡



(提供：中城村教育委員会)

中城城跡は、中城村・北中城村の両村にわたる標高約150mの琉球石灰岩からなる丘陵に立地しています。首里王府に対抗していた勝連城主の阿麻和利をけん制するため、座喜味城主であった護佐丸が国王に命ぜられ、移り住んだ城でもあり、琉球王国の王権が安定化していく過程で重要な役割を果たしました。1853年に日本開国を促したアメリカのペリー提督艦隊が来琉した際には、派遣された探検隊の一行が中城城を調査してその築城技術を高く評価し、その姿を描いた絵画を残しています。

県内でも城壁の保存が最も良好な本城跡は、1954年には多和田真淳氏によって表面調査が行われ、1961年から数年をかけて琉球政府文化財保護委員会により本城跡の石垣修復工事が行われています。1995年からは保存修復のための発掘調査が進められています。

6つの郭からなる本城跡の城壁は、高いところで10m以上あり、各郭ごとに石積み手法に違いが見られます。一の郭と二の郭は布積み、三の郭はあいかた積みとなり、このような石積み手法の違いからこの城が幾度か拡張されたことが推測できます。また、城壁には、南の郭で3カ所、西の郭で1カ所の狭間が設けられています。西の郭と北の郭には井戸が残り、城郭内にはイベや火の神を祀った石囲いや石造りの祠が8カ所あります。

三の郭の発掘調査では中国製陶磁器、グスク土器、須恵器、鐵や刀子などの金属製品、古銭などが出土しています。



城内の狭間



舎殿跡



三の郭入り口

ざきみじょうあと
座喜味城跡



(提供：読谷村教育委員会)

座喜味城跡は、読谷村の中央に位置する丘陵に所在しています。1420年代に有力按司であった護佐丸によって築かれたグスクで、北山が滅びた後にも、その旧勢力を見張る目的で造営され、琉球王国成立の初期に国家権力の安定に重要な役割を果たしました。沖縄戦前は日本軍、戦後は米軍が通信基地として利用したことから一の郭が破壊されたため、1973～1985年にかけて発掘調査と城壁の修復が行われています。

グスクは一の郭と二の郭からなり、それぞれの郭にアーチ型の石門がつくられています。この石門にはアーチがかみあう中央にクサビ石がはめ込まれており、他のグスクには類例がみられません。城壁は「あいかた積み」の手法を主体とし、部分的に「布積み」や「野面積み」も見られます。高さは高い所で約13m、低い所で約3mあり、重厚で曲線が多く取り入れられています。

一の郭には南西に向けた縦16m、横14mの方形石組みの建物跡が発掘調査により確認されています。石組みの中に琉球石灰岩礫を敷き詰めて礎石を配置した建物で、瓦が確認されていないことから屋根のつくりは茅葺きか板葺きと考えられています。

遺物は、中国産の青磁・染付が最も多く、他に土器・古銭などが出土しています。



アーチ門の修築の様子 (提供：読谷村教育委員会)



アーチ門のくさび



染付皿

大交易時代の琉球王国

琉球各地で按司達が勢力を誇っていた三山時代の1372年、中山王（察渡）が中国明の太祖洪武帝の求めに応じ、初めて中国に入貢したのを最初に中国との冊封・進貢関係が始まります。以後、琉球王国は三山統一後も、中国はもちろん、南はシャム（タイ）・安南（ベトナム）・マラッカ・パレンバンなど、北は日本・朝鮮などの国々と盛んに交易活動を展開し、東アジアの中継貿易国として繁栄しました。特に盛んに交易活動を展開していた14～16世紀の時代を「大交易時代」と呼んでいます。1458年に尚泰久王の命により鑄造された「旧首里城正殿鐘」（別名：万国津梁の鐘）に刻まれた「琉球国は南海の勝地にして、三積の秀を鍾め、…異産至宝は十方刹に充滿している」という銘文からも当時の盛んな交易活動の様子を読み取ることが出来ます。中国との貿易品には、琉球からは硫黄・琉球馬（琉球産）、珊瑚、木炭（東南アジア産）、扇・刀剣（日本産）などが、逆に中国からは陶磁器・絹織物・銅鉄・船舶などがありました。特に中国からもたらされた陶磁器類は、沖縄各地のグスクなどから数多く出土しています。その中でも首里城跡、勝連城跡、守邦仁城跡からは、中国の元時代の青花をはじめとする世界的・学術的に見ても希少価値のある貿易陶磁器が出土しています。

琉球王国は、この大交易時代のなかには尚真王の代に簪と6色のはちまきの色で身分を区別する職制・位階制を整え、各地の按司を首里に集住させるなど王国の支配体制が強化されました。また、聞得大君を頂点とする神女組織も整えられます。他にも地方自治の強化などの施策によって琉球王国の基盤が確立され、琉球王国の黄金時代を迎えます。このように政治的・文化的に確立され、首里は王国の都としてますます栄え、那覇は国際的な貿易港として賑わっていました。

交易から生まれた文化

東アジアの中継貿易国として栄えていた琉球王国は、中国・日本・東南アジア諸国との交易により様々な影響を受けたといえます。

琉球王府は、数ヶ月間滞在する冊封使をもてなすために、豪華な宴を催しました。1719年、玉城朝薫によって大和芸能（能・狂言・人形浄瑠璃・歌舞伎）の影響を受けて創作された組踊は宴の正式演目として初めて演じられ、華々しくデビューします。この時の冊封副使であった徐葆光の『中山伝信録』にも組踊に関する貴重な記述が残されています。

美術工芸の分野にも影響が見られます。琉球漆器の起源は明確ではありませんが、王府時代の14世紀頃から中国より高度な漆工技術が導入され、15～16世紀には技術的に洗練された漆器の制作が始められたと推測されています。18世紀頃までには沈金や螺鈿、蒔絵、莨菪など殆どの加飾法が出揃い、制作されていました。

陶器は17世紀頃から作られ始めました。『琉球国由来記』によると1616年に尚寧王が薩摩藩から張獻功（一六）ら3名の朝鮮陶工を招き、湧田窯（現県庁）において陶法の指導を受けています。その後、平田典通（1670年）は中国へ渡り釉薬の技法を、仲村榮致元（1730年）は薩摩で朝鮮式陶法を学び、新しい技法を持ち帰り、制作していきました。1682年には知花、宝口、湧田の3窯が壺屋に統合され制作されるようになります。

書跡の方に目を向けると、伊平屋島の田名家には1523～1850年までの漢文や仮名書きで書かれた32通の辞令書があり、辞令書の書式の変遷を知ることの出来る貴重な資料となっています。また、南島最古の歌謡集である『おもしろさうし』（1巻は1531年編纂）や初の正史である『中山世鑑』、それを漢文に訳した『中山世譜』（蔡鏗・蔡温本）が編纂されました。他にも『球陽』や、最古の地誌『琉球国由来記』（1713年成立）、王国の外交文書である『歴代宝案』（1424～1867年まで収録）、古語辞典とされる『混効験集』（1711年成立）が編纂されています。

なきじん じょうあと

今帰仁城跡



今帰仁城跡は今帰仁村字今泊のハンタ原地内に所在しています。東側を深い峡谷の志慶真川、西側を険しい谷に挟まれた標高100m程の石灰岩の丘陵に立地しています。

今帰仁城跡は、三山時代に北山王が居住していたグスクで、北山はここを拠点に沖縄本島北部を支配していました。発掘調査により、13世紀末頃に築城がはじまり、14～15世紀前期に現在の規模に整備されたと考えられています。北山は1416年に中山の尚巴志によって滅ぼされ、その後、中山が1665年までここに監守を居城させて反乱がおこるのを防ぎました。

城壁の石材は本島北部に分布する硬い古生紀石灰岩を使い、石の面を加工しない野面積みで急勾配に積み上げています。正門にあたる平朝門へいあさかどは1962年に復元されたもので、門の脇には矢や鉄砲などを放つための狭間はざまが設けられ、門の上は物見台となっています。

1972年の日本復帰とともに国の史跡に指定され、1980年より今帰仁村教育委員会によって発掘調査がすすめられています。主郭裏手の一段低いところには志慶真門郭があり、14～15世紀につくられた建物跡が発掘調査によってみつかっています。

出土遺物は大量で、中国産陶磁器が遺物全体の約80～90%と圧倒的に多く、他にも土器、瓦、古銭、銅・鉄製品などがあります。



遺構検出状況



青磁碗出土状況



出土品集合

(写真提供：今帰仁村教育委員会)

かつれんじょうあと
勝連城跡



勝連城跡は、勝連町字南風原赤吹原の標高約100m程の石灰岩台地上につくられ、遠く彼方に中城城跡を望むことができます。第一尚氏王朝の時代、当時の国王に最後まで抵抗した阿麻和利の居城として知られています。

11～12世紀頃に築城されたと考えられ、城跡の崖下に貝塚があることから、先史時代からこの場所が利用されていたことが分かっています。

発掘調査は1960年から琉球政府文化財保護委員会により行われ、1972年には国の史跡に指定されました。これまで行われてきた発掘調査では中国製陶磁器などが多く出土し、特に元青花が出土したことは研究上、重要とされます。また、瓦が出土したことから、瓦葺きの建物があつたと考えられます。その成果から、この城の主は12世紀から15世紀頃まで海外との交易を盛んに行っていたことが分かりました。当時の様子は『おもろさうし』にもたわれ、海外との貿易によって力を蓄え、京都や鎌倉にたとえられるほど栄えた様子がうかがえます。また、城を築く際に、岩山を平らに削り建物を建てるという、かなり大掛かりな工事であったことも分かりました。自然の崖をうまく利用しているため、攻め落とすのが難しかったともいわれています。城内には政治の安定を願い、守り神を祀った拝所（ひやしんがら）があり、現在でも多くの人々が参拝に訪れます。

勝連町は、この重要な遺跡である勝連城跡を後の世代に残していくために、1978年から継続して、復元整備を行っています。



舎殿跡



傍観



元青花破片



青磁皿

しゅりじょうあと

首里城跡



首里城跡は、那覇市首里に所在する県内最大のグスクです。標高120~135mの琉球石灰岩の丘陵上に築かれた琉球国王の居城で、規模は東西370m、南北213m、面積46,167㎡です。14世紀頃に中山王の察度によって築城されたといわれ、1429年の三山統一から1879年の琉球処分に至るまで、王国の政治・外交・文化の中心的役割をはたしています。

城壁は、琉球石灰岩を用いて曲線状に築かれ、総延長が1,080m、高さが5~16m、幅が3mほどあります。城壁の東西両端には、東のアザナ、西のアザナという物見台があり、城内は城壁によって外郭と内郭に分けられ、城内・外には守礼門を含む15カ所に門を設けています。建物の多くは内郭に建てられました。

王の政務と典礼に用いられた正殿せいでんは、琉球最大の三階建て建造物でした。正殿の前には、国家の重要儀式が行われた御庭うらにわと呼ばれる広場があり、北側には北殿（王府の日常政務、中国から来た冊封使の接待をする所）、南側には南殿（薩摩藩の使臣を接待する場所）などがあります。また国家の安全を祈願する聖域として、城内には京の内・首里森御嶽しゅりむらたきなどがあります。

1925（大正14）年、正殿などが国宝に指定されましたが、沖縄戦によって建造物の多くが破壊されました。その後、1972年に国指定史跡に指定され、復元整備と同時に発掘調査を実施しています。発掘調査の結果、正殿は4度にわたって拡張・改修されたことがわかり、京の内からは、世界で3例目となる紅釉水注こうゆうすいじゆをはじめ、貴重な陶磁器が数多く出土しました。京の内跡から出土したこれら一括資料は、2000年に国の重要文化財の指定を受けました。

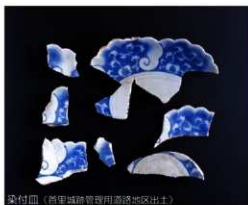


首里城跡北側の城壁と石畳道
(2000~2001年発掘)

首里城跡から出土した陶磁器

琉球国王の居城であった首里城跡からは、当時の繁栄のようすを物語る陶磁器が数多く出土しています。陶磁器は中国・朝鮮・シヤム(タイ)・安南(ベトナム)・日本といった東南アジアや東アジア各地で生産されたもので、嗜好品としての性格のものから、飲食や貯蔵など日常生活に用いるものまで、様々な種類の製品が確認されています。

その一例として、国指定重要文化財に指定された首里城京の内跡出土の陶磁器があげられます。これは城内で、もっとも聖なる場所とされる京の内の発掘調査によって出土した遺物で、14世紀末から15世紀中ごろのものと考えられています。中には紅釉水注・青磁牡丹唐草文花瓶・青花龍文高足杯などの世界的に珍しい資料も含まれています。このような出土例は東アジア全体でも琉球王国、特に首里城に限定されるといっても過言ではなく、万国津梁の鐘の銘文にある「異産至宝は十方刹に充滿せり」の文句を彷彿とさせるものといえます。



染付皿(首里城跡管理用器地区出土)



影絵陶器(首里城跡下之御蔵出土)



首里城正殿基壇



遺物の出土状況(首里城正殿跡)



1994~1995年に行われた首里城京の内跡の調査で多くの陶磁器の破片が出土しました。発掘された資料は世界的にも例の少ない14世紀末から15世紀中の貴重な貿易陶磁器ということが分かりました。

これらは国内でも一級品の資料であり、わが国の歴史上意義深く、学術的にも特に価値の高いものとして、2000年5月に、「首里城京の内跡出土陶磁器」として国の重要文化財に指定されました。沖縄では初めての考古学分野での指定となりました。

京の内跡出土の貿易陶磁器
(国指定重要文化財)

しきなえん 識名園



識名園は、那覇市^{マエ}字真地御殿原に所在し、首里城の南方にあることから南苑^{なんえん}と呼ばれ、沖縄本島南部一帯を一望することができます。また、一般には識名御殿（シチナヌウドゥン）と呼ばれました。造営は1799年で、中国からの使者である冊封使の接待や王家の別邸として利用されました。

1941年、国の名勝に指定されましたが、沖縄戦で破壊されました。1976年、地形や地割は戦前の状況を保っているということが確認されたため、再び国の名勝に指定されています。1975～1996年に復元整備が行われ、1995年11月1日から一般公開されました。

庭園の様式は、日本の造園様式の園内を歩きながら鑑賞する廻遊式庭園^{かいゆうしきていけん}ですが、池の中島にある六角堂やアーチ橋といった中国的な要素が加わって、独特の風格を生んでいます。

沖縄戦や戦後の耕作により破壊されている遺構もあります。発掘調査では、御殿・六角堂・通路などの礎石や石敷といった遺構が検出されました。遺物では、壺屋焼や伊万里焼の陶磁器を主とする生活道具^{くせいかぐ}、瓦や釘などの建築資材、古銭、印鑑などが出土しています。



御殿及び六角堂（提供：那覇市教育委員会）



御殿（提供：那覇市教育委員会）



御殿及び六角堂（提供：那覇市教育委員会）

うたきさいし
御 嶽 祭 祀

御嶽とは、ムイ・グスク・ウガン・スク（宮古）・オン（八重山）などと呼ばれています。御嶽は村落の重要な聖地であり、祭祀はこの場所を中心として行われています。村落には1つ以上の御嶽があり、御嶽の神の性格は村建ての祖先神、英雄、ニライ・カナイの神や航海守護神など多様です。

御嶽の祭祀を行うのはノロやツカサなどよばれる女性たちであり、御嶽は男子禁制の場所とされていました。ノロは琉球王国時代に制度化された役職で、村落の祭祀を司っていた根神とよばれる村落の草分けの宗家の出身者たちとともに、地方の村落を王府の組織に組み入れる大きな役割を果たしていました。そのノロの頂点にたつのが聞得大君であり、尚丹王の即位以後は、国王の姉妹や王妃がその職に就いていました。その就任式である「御新下り」は、首里から多くの神女を従え、琉球王国最高の聖地である斎場御嶽で厳かに行われていました。琉球王国の最高神女である聞得大君の役目は、国王の〈オナリ〉として重要な祭祀を行い、国王の長寿、王室の繁栄、五穀豊穡や航海の安全を祈ることでした。

現在、御嶽祭祀は後継者の不足で減りつつありますが、まだノロを中心に祭祀を行っているところも少なくありません。例えば、豊年祭、種取祭、ウマチーなどの農耕儀礼や雨乞いなどで、人々の幸せを願い、豊かな恵みを求めることが御嶽祭祀の基礎といえます。



聞得大君御殿雲龍黄金簪（提供：沖縄県立博物館）

グスクと御嶽の関わり

聖地である御嶽はグスクの中にもみられます。首里城内には「首里森御嶽」「真玉森御嶽」など10カ所の御嶽があり、京の内はその中でもっとも神聖な場所とされていました。その他のグスクにも御嶽があり、現在でも祭祀の対象となっており、グスクと御嶽は密接な関係にあるといえます。

では、どうしてグスクの中に御嶽があるのでしょうか。1960～1970年代にグスクの性格をめぐって「グスク論争」という議論が行われました。その中で仲松弥秀氏は、グスクは「石垣で囲まれた神のいる場所」で、「神を礼拝する拝所とを一つにした聖所」であるという「聖域説」を唱えました。これに対して「集落説」や「城館説」が唱えられ、グスクの性格について議論されました。

発掘調査によってグスクと御嶽の関係ははっきりと分かる例はまだ少ないのですが、勝連城跡の一の郭にあるタマノミウジという拝所は、発掘調査によって本来は建物に伴う一部分で、城が使われなくなった後に拝所になったのではないかと考えられています。



中城城跡内御嶽



斎場御嶽 奇満

せいふあうたき 齋場御嶽



齋場御嶽は知念村字久手堅サヤハ原に所在し、人工的な建造物はみられず、森や隆起珊瑚礁の岩山を聖域としています。

齋場御嶽には「大庫理」「奇満」「三庫理」など全部で6つの拝所があり、それぞれが石畳の参道で結ばれています。また、「三庫理」の拝所からは「神の島」と伝えられる久高島を望むことができ、かつては男子禁制でした。

琉球の歴史書である『中山世鑑』によると、琉球を開いた神である「阿摩美久」がつくった御嶽とされており、琉球王府時代には王国の安泰を祈願する祭場で、国王が知念半島の御嶽を巡る「東御回り」の拝所の一つでした。また、琉球王国の神女の中で最も位の高い聞得大君の就任式である「御新下り」もここで行われました。

齋場御嶽は尚真王により整備され、琉球王国を精神面、信仰面から支える国家的な祭祀の場としての重要な役割を果たしていました。

知念村教育委員会により1994年から発掘調査が行われ、これまでに、奇満から大庫理にかけての当時の参道が明らかになりました。また、参道の東側にはこぶし大の石を円状に組み合わせた遺構が発掘され、儀式の際、松明を立てるための台として使われていたと推測されています。一方、大庫理では瓦葺きの「殿」があった事が明らかになりました。「三庫理」からは祭祀に用いられたと考えられる陶磁器や金の勾玉などがひとまとまりで出土し、2001年に国の重要文化財の指定を受けました。



勾玉と金の鳩目鏡 (提供：知念村教育委員会)



三庫理出土品：国指定重要文化財
(提供：知念村教育委員会)



勾玉等出土状況 (提供：知念村教育委員会)

そのひゃんうたさいしもん
園比屋武御嶽石門



園比屋武御嶽石門は、那覇市首里^{しゆいしん}、守礼門と歡会門^{かんわいもん}の中間の道沿いに所在しています。石門は八重山の西塘^{にしじょう}が築造したとされ、石門の正面に架けられた石掘りの扁額^{へんがく}には「首里の王おきやかもいかなし（尚真王の神号）の御代にたて申、正徳十四年己卯十一月二十八日」と刻まれています。このことから石門は1519年に創建されたと考えられています。園比屋武御嶽は、国王が城外に出るときに帰路往路の安泰を祈願したと伝えられています。御神体は石門奥の丘全体であり、石門は拜殿としての役割を担っていました。

石門の大きさは、両袖垣端間が18.983m、門の幅が2.39m、門の奥行が2.779m、基壇天端より棟上端までは3.752mあります。屋根は板葺唐破風屋根の形をしており、内妻の唐破風には懸魚が彫られています。軒は垂木形で、大棟の両側面には唐草文が彫られています。また、棟の中央は火焰宝珠、両脇は鬼瓦で飾られています。

1933（昭和8）年、国宝に指定されますが、首里城跡の地下に第32軍司令部があったこともあり、沖縄戦において被害を受けました。その後、1957年に琉球政府文化財保護委員会、1981～1986年に那覇市により修復が行われています。1972年、沖縄の日本復帰と同時に国指定の重要文化財として指定されました。

1956（昭和31）年に行なわれた整備の際に金製の鳩目銭^{はとめせん}なども出土しています。

3.3.3 尚家の家系図

第一尚氏

尚思紹 — 尚巴志 — 尚忠 — 尚思達 — 尚金福 — 尚泰久 — 尚徳
(1406～1421) (1422～1439) (1440～1444) (1445～1449) (1450～1453) (1454～1460) (1461～1469)

第二尚氏

尚円 — 尚宣威 — 尚真 — 尚清 — 尚元 — 尚永 — 尚寧 — 尚豊 — 尚賢 — 尚眞
(1470～1479) (1477～1529) (1527～1555) (1556～1572) (1573～1588) (1589～1620) (1621～1640) (1641～1647) (1648～1668)
— 尚貞 — 尚益 — 尚敬 — 尚稔 — 尚温 — 尚成 — 尚顯 — 尚育 — 尚泰
(1669～1709) (1710～1712) (1713～1751) (1752～1794) (1795～1802) (1803～1799年) (1804～1834) (1835～1847) (1848～1879)

たまうどうん 玉 陵



玉陵は、那覇市首里金城町せんじょうに所在し、首里城跡の西側にあたります。「玉御殿」とも書かれます。世界遺産には独自の石造記念物のデザインを示すものとして登録されました。

第二尚氏の墓陵として1501年に尚真王によってつくられた玉陵は、沖縄戦で大きな被害を受けたため、1960年に一部の修復工事が、1974～1977年にかけて全体の修復工事と内部の調査が行われています。

外観は破風形の屋根で、東室、中室、西室の3つの部屋があり、東室は国王と王妃の厨子くし、中室は洗骨を待つ間のシルヒラシの場所、西室は王子・王女の厨子を収めています。3つの部屋では特に東室が優れたものとされています。周囲には石垣を巡らせ、前庭、内庭からなり、第一門、中門ともにアーチ門になっています。両脇の塔上には獅子が一対すえられ、高欄の羽目板には獅子や牡丹などを刻んでいます。また、内庭には玉陵に葬られるべき人を定めた文を刻んだ石碑が建っています。戦前は陵の左右に番所が建てられていました。

3つの墓室には初代の尚丹王の石厨子などが70基収められ、牌緑岩せきりよくがんという中国産の石材を用いた石厨子は牡丹などが刻まれており手の込んだ造りになっています。副葬品はほとんどなく、手鏡などが確認された程度です。

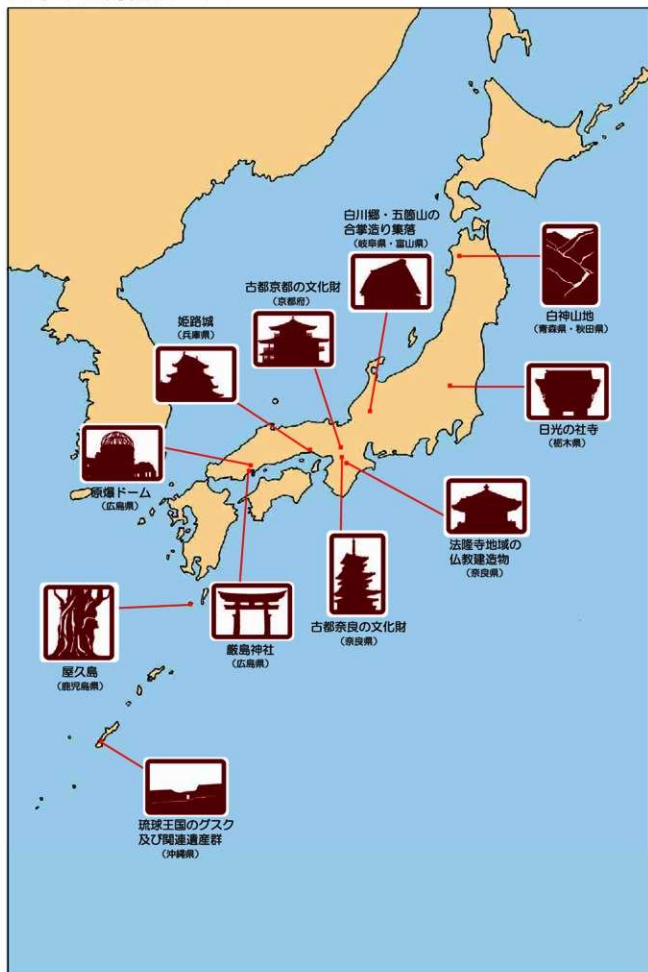
3.10 王家のお墓

王家のお墓と言えば玉陵と並んで、浦添ようどれうらそえがよく知られているよね。ようどれとはアサトシあさとし（朝風）、ユウトシゆうとし（夕風）の転訛てんぎしたものなんだって！浦添ようどれは、浦添城跡北側の崖下中腹にある英祖王統えいそおうとうと尚寧王のお墓なんだ。1261年に英祖王が築いたと言われているんだよ。その後、浦添出身の尚寧王（第二尚氏）が1620年に修造して、英祖王陵の側に一族の遺骨を移して、尚寧王自身も葬られたんだって！！



浦添ようどれ

日本の世界遺産マップ



用語解説

ユネスコ

1946年に設立された国際連合の専門機関の一つである教育科学文化機関のこと。諸国民の教育、科学、文化の協力と交流を通じた国際平和と人類の福祉の促進に貢献することを目的とする。

I COMOS

1966年に設立された非政府組織の国際記念物遺跡会議のこと。人類の遺跡や建造物などの歴史的遺産の保存、修復を目的とする。

IUCN

1948年に設立された非政府組織の国際自然保護連合のこと。生物学的多様性の保全や絶滅の危機に瀕した生物や生態系の調査、環境保全の勧告などを目的とする。

ニライ・カナイ

沖縄の祭祀儀礼における世界観のことで、主に海の彼方、海の底にあると考えられている。そこから来訪する神々が豊穡や幸などをもたらす。

オナリ

兄弟からみた姉妹をいう。オナリ神信仰とは兄弟を守護し、祝福を与えることである。

鳩目銭 (はとめせん)

琉球王府時代の貨幣。六開き銭。

シルヒラシ

遺体を白骨化させること。

緩衝地帯 (かんしょうちたい)

登録範囲の環境の適切な保全のため、その周囲に利用制限を加えた地域。

按司 (あじ)

琉球各地の政治的支配者。後の王府時代には位階名になる。

狭間 (はざま)

矢などを射掛けるため、城壁に設けられた穴。「万国津梁の鐘」の銘の要約

琉球国は、諸外国間の架け橋となるにふさわしい場所と地位を兼ね備えているので、交易により珍しい産物や宝が集まり国中にあふれている、の意。

扇額 (へんがく)

壁や門などに掲げた細長い額。例えば、守礼門に掲げられている「守禮之邦」の額など。

懸魚 (げぎょ)

破風の軒下、又はその左右に付ける装飾のこと。

参考文献

- ・沖縄県教育庁文化課編『世界遺産 琉球王国のグスク及び関連遺産群』「琉球王国のグスク及び関連遺産群」世界遺産登録記念事業実行委員会、2001年。
- ・『沖縄大百科事典』全4巻、沖縄タイムズ社、1983年。
- ・『沖縄の文化財Ⅱ 史跡・名勝編』沖縄県教育委員会、1994年。
- ・『沖縄の歴史と文化』沖縄県教育委員会、2000年。
- ・『海上の道 沖縄の歴史と文化』読売新聞社、1992年。
- ・『概説 沖縄の歴史と文化』沖縄県教育委員会、2000年。
- ・『勝連城跡 昭和56年度本丸南側城壁修復に伴う遺構発掘調査報告』勝連町教育委員会、1983年。
- ・『勝連城跡—南貝塚および二の丸北地点の発掘調査—』勝連町教育委員会、1984年。
- ・『勝連城跡—北貝塚、二の郭および三の郭の遺構調査—(1)』勝連町教育委員会、1990年。
- ・『国指定史跡 勝連城跡 環境整備事業報告書Ⅲ』勝連町教育委員会、1992年。
- ・『座喜味城跡遺構調査報告書(1)』読谷村教育委員会、1975年。
- ・『座喜味城跡 第3・4次遺構発掘調査』読谷村教育委員会、1978年。
- ・『座喜味城跡 第5・6次遺構発掘調査』読谷村教育委員会、1980年。
- ・『国指定史跡 座喜味城跡 環境整備事業報告書』読谷村教育委員会、1986年。
- ・『国指定史跡 座喜味城跡 環境整備事業報告書(Ⅱ)』読谷村教育委員会、1986年。
- ・溝野賢司『総合学部に役立つみんなの世界遺産 ②わたしたちの国—日本』岩崎書店、2000年。
- ・『世界遺産』昭文社、2001年。
- ・『世界遺産ガイド—日本編—2001改訂版』シンクタンクせとら総合研究紀行、2001年。
- ・『世界遺産Q&A—世界遺産の基礎知識—2001改訂版』シンクタンクせとら総合研究紀行、2001年。
- ・『世界遺産データブック—2001年版—』シンクタンクせとら総合研究紀行、2001年。
- ・『「世界遺産」琉球グスク群』琉球新報社、2000年。
- ・高良道吉『新版 琉球の時代 大いなる歴史像を求めて』ひるぎ社、1980年。

- ・知念村教育委員会編『知念村 文化財ガイドブック』知念村教育委員会、2000年。
- ・當真一監修『沖縄のグスクめぐり』むぎ社、1996年。
- ・渡久地真『中城跡発掘調査概要』『南島考古だより』第55号、沖縄考古学会、1996年。
- ・『特別展 グスクグスクが語る古代琉球の歴史とロマンス』沖縄県立博物館、1985年。
- ・『中城城跡』中城村教育委員会、1982年。
- ・沖松弥秀『神と村』集社、1990年。
- ・『今帰仁城跡発掘調査報告(1)』今帰仁村教育委員会、1983年。
- ・『今帰仁城跡周辺遺跡範囲確認調査報告書』今帰仁村教育委員会、1986年。
- ・那覇市教育委員会編『圓比屋武御石門き損調査報告書』那覇市教育委員会、1979年。
- ・那覇市教育委員会編『国指定重要文化財(建造物)圓比屋武御石門修復のための基礎調査報告書』那覇市教育委員会、1981年。
- ・那覇市教育委員会社会教育課編『那覇市の文化財』那覇市教育委員会、1986年。
- ・那覇市教育委員会編『重要文化財圓比屋武御石門保存修理工事報告書』那覇市教育委員会、1986年。
- ・(財)文化財建造物保存技術協会『重要文化財 玉陵復原修理工事報告書』重要文化財玉陵復原修理委員会、1977年。
- ・『復帰20周年記念特別展 琉球王国—大交易時代とグスク—』沖縄県立博物館、1992年。
- ・『文化財に見る 沖縄の自然・歴史・文化』沖縄県教育委員会、1992年。
- ・『蘇る 琉球国中山王陵 浦添ようどれ』浦添市教育委員会、2000年。
- ・宮城栄高、高宮雅衛編『沖縄歴史地図 歴史編』柏書房、1983年。
- ・(財)文化財建造物保存技術協会『名勝国名環境整備事業報告書』那覇市教育委員会、1996年。
- ・ユネスコ世界遺産センター監修『ユネスコ世界遺産4 東アジア・ロシア』講談社、1998年。
- ・湧上元雄、大城秀子共著『沖縄の聖地—拝所と御願—』むぎ社、1997年。

協力者一覧

この企画展を開催するにあたりましては下記の機関に多大なご協力を賜りました。
ここに記して深く感謝申し上げます。（順不同）

【出品協力】

沖縄県立博物館
知念村教育委員会
勝連町教育委員会
今帰仁村教育委員会

【写真提供】

沖縄県立博物館
知念村教育委員会
勝連町教育委員会
今帰仁村教育委員会
中城村教育委員会
読谷村教育委員会
那覇市教育委員会

企画展

「世界遺産展 -出土品からみた琉球王国のグスク-」

2002年2月1日発行

編集・発行 沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125

沖縄県中頭郡西原町字上原193-7

Tel 098-835-8752

Fax 098-835-8754

印刷

平山印刷株式会社

〒901-1111

沖縄県南風原町字兼城270-1



沖縄県立埋蔵文化財センター